

平成 28 年度後期公開講座 国際文化都市としてのパリ

10/29 (土) 13:30 – 15:00 エスニックシティ・パリ

国際文化学科 石川清子

ねらい：パリは世界的文化発信の地で多くの外国人や観光客を引き寄せるだけでなく、定住のための移民・難民・亡命者を受入れてきた都市である。パリにあるのはエッフェル塔や凱旋門だけではない。観光地を外れたパリの日常生活圏に入れば、世界各地からやって来て暮らす人々の多民族・多文化のパリがある。そこから生まれるダイナミックな都市の力を観察する。

映画の紹介：『パリ 20 区、僕たちのクラス』(2008 年、F. ベゴドー監督) から『奇跡の教室-受け継ぐ者たちへ』(2014 年、M. C. ・マンション=シャール監督)

パリのなかの外国：参考資料紹介

1. 稲葉由紀子『パリ、異邦人たちの味』CCCメディアハウス、2016 (パリのエスニックフード案内)
2. 清岡智比古『エキゾチック・パリ案内』平凡社、2012 (移民国家フランスを映すエスニックパリ案内)
3. にむらじゅんこ『パリで出会ったエスニック料理』木楽舎、2006 (41ヶ国の料理と文化を仔細に観察)
4. ミシェル・パンソン他『パリの万華鏡』原書房、2006 (人種・民族・文化の「モザイク都市」パリ)
5. 映画『パリ、ジュテーム』2006、18 人の監督による 18 の区のオムニバス映画

フランスの外国人・移民データ：

2008 年現在、フランスに居住する人口の 8.4%が移民 [1]である。移民の 2 割は 40 年以上フランスに住んでおり、3 割はフランスに来て 10 年未満である。移民の直系卑属はフランス本土人口の 11%を占め、その半数は 18 歳から 50 歳である。また、彼らの半数は片親だけが移民である。

2008 年現在、移民の 43%はアフリカかマグレブ諸国、または旧フランス植民地の国の出身である。アジア出身の移民は全体の 7 分の 1 強、またアメリカやオセアニア出身者は 5%に過ぎない。

2010 年には、15 歳以上の移民 270 万人がフランス本土の労働市場に就業者あるいは失業者として参加しており、移民は労働人口の 9.4%を占めている。移民の失業率は 2010 年には非移民の失業率を 7 ポイント上回っている。

2010 年にフランス国籍を取得した外国人は 14 万 3,000 人で、2009 年より 5.5%の増となった (2009 年には国籍取得者数が前年より 1.2%減少していた)。国籍取得者増加の主な要因は、フランス人との婚姻を理由とする国籍取得が増えたことである。

[1] 移民とは、外国で外国人として生まれ、フランスに居住する者。このため、フランスに居住する外国生まれのフランス人は移民ではない。移民の中にはフランス国籍を取得した者と外国人のままの者とがある。

在日フランス大使館 HP 「フランスを知る人口 2012」

<http://www.ambafrance-jp.org/article5731>

2015 年の 2 度の「テロ」襲撃事件とマグレブ系移民二世

・2015 年 1 月 7 日：シャルリー・エブド襲撃事件

17 名の市民が犠牲

実行犯：アラビア半島のアルカイダ（アルジェリア系フランス人、マリ系フランス人）

1月11日：全国で追悼集会/ “Je suis Charlie” /表現の自由

- ・ 2015年11月13日：パリ同時襲撃事件

死者130名

実行犯：イスラム国（IS）（モロッコ・アルジェリア系フランス人・ベルギー人）

- ・ 2016年7月14日には南仏ニースの目抜き通りで革命記念を祝う花火観客群にトラックが突入

パリのエスニック地区

A. ベルヴィル：アジア、アフリカ、アラブ系、様々な国から移住してきた人々

10, 11, 19, 20区をつなぐ地域

昔からの下町、労働者街、

B. ユダヤ人： マレ地区、ロジェ通り（4区）

フランスは現在、イスラエル、合衆国に続く70万人（全人口の1%強）のユダヤ人を抱える。
フランス革命以降、市民権を獲得（仏全土には4万人がいたが、パリには500人程度。13世紀頃からマレ地区に住みつく）

1881年、大量の東欧系ユダヤ人（アシュケナジーム）を受入れ（帝政ロシアの皇帝暗殺を機にユダヤ人迫害＝ポグロム）

ナチ占領下のフランスで8万人のユダヤ人が収容所送り（1942年13,000人一斉検挙）

50, 60年代、マグレブ諸国独立時に北アフリカのスペイン系ユダヤ人（セファルディーム）が到来

C. マグレブ（北アフリカ）のアラブ・ベルベル人：文教地区（5区）とバルベス、グットドール地区（18区）

19世紀末から、労働力としてアルジェリア中心に男性単身で渡仏。パリや北仏炭鉱

第一次大戦、第二次大戦には兵力としても前線に加わる →パリ5区のモスク

戦後「栄光の30年」を支える安価な労働力として、大量に男性単身移民、18区の家具付きホテル等に住む。

1973年オイルショック後、家族呼び寄せ →フランスの地に定住、次世代以降が誕生。多くは大都市郊外に居住。

D. 中国人、華僑、東南アジアの人：13区。オランピアド地区、イブリー周辺の1960年代再開発地域。

19世紀末からの中国本国出移民（温州、上海南）と、フランス領インドシナ崩壊後の1960-70年代、ベトナム、カンボジア、ラオスの戦争や内戦からの亡命、難民（潮州華僑）。

もともと農村地帯→パリ編入→工場進出→再開発→空き家現象（かつての工場地帯は人気がない）

E. インド系南アジア人：フォーブール・サン＝ドニ、国鉄北駅付近（10区）

南インド旧フランス領ポンディシェリからのタミール人（ヒンドゥー教）

「インド」色溢れるパサージュ・ブラディはパキスタン、スリランカ、バングラデシュから近辺はその他、トルコ、ブラックアフリカの人も。服飾縫製産業のアトリエが多い地区。